

## 大きな森の家 : 壇一雄の久留米時代 (一)

長野, 秀樹  
久留米大学附設高等学校教諭

<https://doi.org/10.15017/10401>

---

出版情報 : 文献探究. 25, pp.11-17, 1990-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



檀一雄は、自分の経歴を問われた時、その問い方に合わせて次のように答えた<sup>注1</sup>。

「出生地は何処ですか？」と云う問には、正直に、

「山梨県南都留郡谷村です」

と答えるよりほかにない。また、

「出身地はどこですか？」と言う問には、先ず、まあ、本籍地、つまり父母の地をとって、

「福岡県柳川です」

さて、

「何処で少年時代をお過ごしになりましたか？」

と言う問には、

「栃木県足利市です」

と答えるよりほかにないだろう。

このように、その間に合わせて、三つの土地の名を挙げたと言うのだが、檀が、その少年期を過ごした土地は、この他にも、東京の谷中や、福岡市鳥飼、福岡県久留米市等がある。

本稿では、その内、大正七年六歳から一年間と、大正九年からやはり、一年間を過ごした久留米時代についてと、その母の実家について述べる。

檀一雄の母トミは、明治二十六年四月十日に本戸米吉の次女として福岡

県御井郡国分村野中（現在の久留米市野中）に生まれている。トミによれば、本戸家は、「明治維新までは、筑後の久留米藩士で、二百五十石から三百五十石の禄をはむ、大小姓で」<sup>注2</sup>「先祖は天草、本渡の城主であった」という。

久留米藩の『御家中畧系譜』巻五に依れば、本戸家の祖は彦左エ門といひ、肥前島原高力撰津守に仕え、寛文八年高力氏が改易になった後、浪人し、延宝二年長崎において死去している。一説に依れば、茶師だったともいう。その子喜左エ門正行の時に久留米藩に召し抱えられ、さらに、その子丹右エ門正晴の時に二百三十石ほどの禄を得ている。その後も二百三十石の禄を維持し、同書で確認できる範囲では、嘉永五年に十一代目の記藏（後に勝三郎正高）という人物が、二百三十石を相続し大小姓役を勤めているのが最後である。<sup>注3</sup>トミの父米吉はその長男で、万延元年に生まれている。

米吉については、トミの証言の他に、『御井郡人名辞書』（小俣愨編集兼発行、大正二年）に次の記事がある。

本藤米吉 国分村

万延元年十月十一日久留米市京町に生る。（旧藩時代砲術及び柔術の指南家）明治十一年久留米師範学校を卒へ、元上妻郡山内中学校及び福島中学校に教諭となり、十六年辞職、翌十七年本県庁に奉職す。

爾来好んで土木学を自修し、得るところあり。二十九年職を辞して筑後鉄道の測量及び、久留米福岡其他県下著名地の下水溝設計に従事し、好評あり。三十二年再び県庁に入り、筑後川遠賀川等の河川台帳

作成に関する測量事務を掌り、また耕地整理基本調査甘木事務所長となる。四十三年国分村民の懇請に応じ、官を去りて同村長に就職す。

このように米吉は明治四十三年から、国分村長を務めるのだが、その期間は同年十一月から、大正七年十一月まで及ぶ。ここに表われている米吉像は、教職に就いてから、土木学を独学で学び、土木技師として活躍した後、更に村長として政治に携わったという、社会人として成功を収めた人物の姿である。

こうした米吉の姿を、娘であるトミも証言している。<sup>注4</sup>

父は万延元年に生まれています。幼いときから数学に秀で、久留米師範を卒業して、十六歳から八女中学で数学を教えたりしていました。が、まもなく測量技師として、福岡県の県庁の土木課に奉職しました。それから、県内の河川の改修や、道路の開設、田畑の灌漑のための用水路の新設、耕地の整理などの仕事に、明け暮れていました。

#### △中略▽

遠賀川、筑後川の改修工事に忙しかった父の姿は、今も私の記憶に残っていますが、父は常に仕事の現場に生活し、私がもの心ついてからは、月に何回か、仕事先から久留米の野中——当時は、福岡県三井郡国分村大字野中の家に、帰ってきていました。

この野中の家というのは、所謂下屋敷で、現在は、その一部が、筑邦銀行の研修所になっている。久留米市野中町上の原251というのが現住所である。(後掲の地図を参照) 檀の言葉を借りるなら、「筑後川の支流が右に折れて、椎の森と葎の熟れる野原をくぐる。そのほとり」である。<sup>注5</sup>「筑後川の支流」とは高良川のこと、近くの高良山付近に源を発し筑後川に注ぎこむ全長八・八キロの一級河川で、野中辺りで、川幅は3〜4メートルほどである。その堤防のすぐ横の屋敷で、大正七年から、檀は小学校入学後の一年間を祖父と共に過ごしたのである。

もう少し詳しくいうと、檀が国分小学校(現在の久留米市立西国分小学

校)に入学したのが、大正七年四月二日であり、「原籍山門郡沖端村沖端八一番地へ復帰」のために退学したのが、翌大正八年九月九日である。住所は国分村大字野中二五一で、保護者は祖父の本戸米吉。成績は第一学年のみではあるが、六科目全甲である。先に、大正九年から、さらに一年間野中で暮したと述べたが、それは同校の資料では確認できない。また、退学の理由にも不審が残るが、それらも今後の研究に俟ちたい。

この時期、両親は青森県にいた。父参郎が福岡工業学校から弘前工業学校に転任したためである。既に両親の不仲は始まっていたが、両親が離婚することを前提として、母方の実家に預けられたわけではないようである。青森という、余りにも氣候風土の違ふ土地に対する危惧と、参郎が何時まで同校の教師を続けるのかはつきりしなかったためらしい。入学式には祖母が連れていったというが、米吉は同年の十一月まで国分村村長であったから、村長の孫として、檀が学校の注目を集めたであろうことは想像に難くないし、檀自身、入学式の当日に教室で、将来、総理大臣になると語ったという。<sup>注6</sup>この祖父母との生活について檀は「天明」(「現代」昭和十九年五月〜六月)の中で次のように述べている。

物心ついてから、私がどうして両親の手元を離れ、久留米の母方の祖父母の家にあづけられたのか、今はつきりとした事情はわからない。おそらく山梨から東京、東京から福岡、福岡から、青森と教職を追うて転々としてゐた両親の乏しい生計に、私の養育は負担が過ぎたものであつたらう。

それで私は久留米の野中といふところにある、祖父母の大きな林の中の一軒家にひきとられた。

太郎。おまへは物心がついたならば、必ず一度は父が育つた播磨の天地をたづねるがよい。久留米の忠霊塔の真下にある高良川に沿うた大きな森の家が、私が四歳から九歳迄をくらし忘れられぬ故里である。

太郎。野中の父の幼年の日は淋しかったよ。林の中に毎夜ふくろろや五位鷲が啼いて、辺りを包む虫の声は一夜のうちに私をとりころして終ふほどだった。私は一人で寝かされてゐたから、嵐の夜に櫛や檀の大木がぎいぎいひしめくおそろしさは、おそろく、今のどんな子供達に伝えてもわかるまい。

この作品は、前年に生まれた長男太郎へむけて、檀が自分の半生を語ったものであるが、例えば、「四歳から、九歳迄をくらしした」などという小説としての虚構はある。ただ、「私がおまへに書くこの手紙はこれが最初で、また最後のものになるかもしれない。この手紙は思ひも設けず、おまへの遺書にならないと誰が云へよう。」と最初に断わっているとおり、全体としては、当時の檀の心情を正直に吐露したものと考えてよいだろう。その中で檀は、野中のことを「揺籃の天地」と呼び、「忘れられぬ故里」とも称しているのである。

トミに依れば、「二千坪の屋敷には、椋や、楠などの大木が薄暗いまでに茂り、その大木の根もとには、狐や狸も住んでい」たということである。現在でも筑邦銀行の研修所の敷地内には大木が茂り、昔日の面影を残しているし、トミの従兄弟に当たる本戸幸彦氏によれば、敷地は五反ほどあり、屋敷内と高良川とを分けている堤防もなく、竹藪などもあり鬱蒼とした森の中の家であったということである。

そこでの生活について、檀は更に続けて、次のように述べている。

野中の母方の祖父の家系は有馬藩の士族である。父方の祖父の家系も立花藩の士族であったが、野中の祖父に終生そのまま武士の威容を保ちつつけて、私の幼年の日の教育にのぞんでゐた。

祖父母は幼少の私を大層可愛がつてゐたのであつたらう。けれども今の子供達が、かれらの両親や祖父母から愛玩されるとは、まるで趣が違つてゐた。独立の起居については過酷な迄に厳格であつた。だか

ら私は祖父母と、一緒に寝たことも、入浴したことも、食事を共にしたこともない。

幼少の父は一人で箱膳を据ゑ、板の間に端座して自分の食事を畢るのが慣はしてあつた。

最早、今日、我々の周囲の何処を見回しても、こうした少年の姿を見ることはないし、檀がこの文章を書いた、昭和十九年の段階でも、檀は嵐の夜大木がきしむ、その音の「おそろしさは、おそろく、今のどんな子供達に伝えてもわかるまい」と述べているし、「今の子供達が、かれらの両親や祖父母から愛玩されるとは、まるで趣が違つてゐた」とも述べている。そして、「母の手」(「知性」昭和十七年十一月)の中でも、祖父母との生活を次のように回想している。

祖父は私を甘やかしたこともなければ、叱つたこともない。例えてみれば祖父の姿を思いだしてもその声を思いおこせないくらいのものだ。私はそんな祖父が大層好きであつたが、却つておそろしく何をねだることも出来なかつた。うむうむとうなずくだけだからである。私達が一緒に食事を摂るようなことは絶えてなかつた。夏分であると祖父は座敷の縁にきまつていたし、私は勝手の次の間の板張りの上に座を敷いて、同じように、一人、箱膳で食べていた。祖母や使い女達は大抵小半時も遅れて、勝手に食事を済ませるのである。

△中略▽

私が躊躇なく私の故郷だと呼び得る祖父母の家の毎日はこんなものであつた。そこで私が祖父母から果して愛されていたのか、それともうとまれていたのかそれは知らない。祖父の家には静肅な規律があつて、その規律のなかでそれぞれの孤独に耐えてゆけばそれでよかつた。新しい自分自身の勇氣を撰んでゆけばそれでよかつた。

このように、二つの作品に共通して、描き出されているのは、両親からも離れ、祖父母との距離も縮めることのできぬ孤独な少年の姿である。そ

して、先に「天明」の中で、「揺籃の天地」「忘れられぬ故里」と呼んでいたのと同じく、ここでも、「躊躇なく私の故郷だと呼び得る祖父の家」と、檀は述べているのである。

だが、勿論私は檀にとつての故郷が久留米市野中の祖父の家なのだ、などと主張しているのではない。檀自身が、先に引用したように自分の経歴を様々に呼びならわしているし、父方の祖父が住み、檀の本籍地でもあった柳川のことを、「柳川は私にとつては、かけがえのない魂の揺籃に相違ない」とも述べているのである。<sup>注8</sup>このように「故郷」と呼び得る土地を複数持っていることが、檀の特徴なのであって、この他にも中学を卒業するまで、父と共に暮した足利市も、檀にとつて故郷と呼び得る土地の一つなのかも知れない。そして、その各々の土地に各々特徴があるのだから、檀も次のように述べているのである。<sup>注9</sup>

どういふわけか、私は両親の膝下に、継続的に二年と居たことがなくて、母方の祖父の家や、父方の祖父の家に預けられたから、もし何らか私に特技があるとすれば、人情風俗が一つとして安定したものであるということ身を以て体得した一点にあるだろう。

父方の祖父の家は柳河の沖端だ。母方の祖父の家は久留米の野中だ。距離にしてたった五六里しか離れていないこの二つの地域が、私の幼年の頃には、現在のモスコートと東京ほどの相違にも感じられなかった。

大正五、六、七、八年。

立花藩と有馬藩の封建の家風はまだ現存していて、父方の祖父の家の風儀と、母方の祖父の家の風儀と、とえらい相違を見せていた。

母方の祖父の家と、父方の祖父の家と、どのような「とえらい相違」があったのか、ここでは檀は触れていないが、トミはその結婚した当時を振り返って、このように回想している。<sup>注10</sup>

わずか数日でも、沖端の生活は、実家と比べて出入りの人も気さくに、身分の上下などなく、漁師の丑さん、松さんも心安く、姑をおっかん、おっかん」と呼びながら手伝い、俵引の吉ちゃんは、座敷でお酒も飲めば上手な踊りも披露する、という案配でした。

私の実家では、近所の人は勝手口の戸を少しあけて「奥様はおられますようか」と、そつとのぞき、「はい、おりますよ」という返事を確かめて、初めて勝手もとに入ります。父に用のある人も、父の部屋に入ることはなく、次の間か縁側の外で話し、板の間に下がって、お茶や食事のもてなしを受けて返っていました。武士の生活を最高のものでして育てられた私には、古賀家（檀の父参郎は古賀家の次男だが、養子である父親の姓、檀を継いでいた。——引用者注）格式ばらぬ心安さが、珍しく、多少の違和感とともに、別の社会を見る新鮮さを感じました。

同じ武士の出とはいいながら、漁師の町沖端で、質屋等を経営し、人の出入りも頻繁な父方の実家と、村長として、武士の格式を残したまま、生活する母方の実家の間に大きな懸隔があるのは、ある意味で当然のことだろう。そして、その差を檀は「現在のモスコートと東京ほどの相違」とも感じていたのである。勿論、この差は両家の「風儀」の差にしかな過ぎず、檀は両家で同じように、「外様の子弟のように扱われた」とも述べているのである。少なくとも、「人情風俗が一つとして安定したものではないということ身を以て体得した」と述べる檀の体験の一方の核として、この野中の生活があったことは間違いないだろう。

こうした幼児体験が、具体的に檀の精神形成にどのような影響を与えたかについては、ひとまず措き、次に当時の久留米という町がどのような町であったかを確認しておきたい。当時の久留米の雰囲気や良くなる檀の回想に次の文章がある。<sup>注11</sup>

太郎。父の記憶の中で、はじめて世界の動きといったものに関連の

ある出来事は、先の世界大戦（第一次大戦——引用者注）の際のことである。出征兵士を見送つたのか、それともその凱旋を出迎へたのか、今はつきりとは記憶しないから、父の何才の時の出来事かはおぼえてゐない。

ただ、千万の力強い軍靴の轟きと日本の兵士の堂々たる進軍の有様をまるで暴風のやうに眺めたばかりである。それらの武装をした兵士達の雲つくばかりの大きさと力に、ふるへをのいた其日の正直な気持を覚えてゐる。左様、太郎。父は後の青島陥落の提灯行列をこれと対比しはつきりと覚えてゐるから、おそらく五才以前のことであつたらう。まだ五才を出ていなかった私が、その巨大な行進の道のほとり

で、異様な戦慄に身をふるわせて泣いたのに不思議はなかつた。

明治の終りから大正の初めにかけての久留米は、こうした軍靴の響きに満ちた町だったのである。それまで福岡に設置されていた歩兵第四十八連隊が、久留米に移転したのが明治三十年四月である。更に明治四十年には、第十八師団司令部も久留米に設置された。続いて、同師団内の歩兵第五十六連隊や、騎兵第二十二連隊等が各地から久留米の新築された兵営に移転してきた。そして、それらの中心を成したのが、国分村に設置された四十八連隊（現在は自衛隊駐屯地）であり、各部隊もその国分村を中心として、その周囲に設置されたのである。人口も急増している。明治四十年から三年間で隣村の合川村では一五〇人増なのに、対し国分村では、二九五六人増である。また、四十四年十一月には、陸軍大演習が久留米を中心にして行われ、明治天皇も明善中学に設置された大本営で視察している。

このように、明治の終りから、久留米の町は軍都としての性格をはつきりと持ち始め、国分村はその中心だったのである。

そして、檀が「美しき魂の告白」（「鷗」昭和九年七月）の中で描き出したドイツ軍の捕虜の娘「ぼーら」との出会いも、そうした国分村の性格に負うところが大きなのである。久留米にドイツ軍の捕虜が収容されるの

は、大正三年一〇月の五十五名が最初である。第一次大戦の捕虜である。その後も青島攻略（同十一月七日）による四千五百名程の捕虜が、日本各地の収容所に送られ、その内久留米には最大で千三百名程の捕虜が収容され、全国の収容所の中でも最多であつたという。大正七年十一月には、ドイツが降伏し、翌八年六月ベルサイユ条約が調印され、捕虜も本国へ送還され始め、久留米収容所も翌大正九年一月に最後の捕虜を送り出している。西国分小学校に残る書類に依れば、先に述べたように、檀が通学しているのは、大正七年四月から、翌八年の九月までだから、久留米に捕虜が収容されていた期間と重なるのである。

トミにも次の証言がある。<sup>注13</sup>

その後、青島からドイツ人の捕虜が大ぜい、大きな袋を背負つて収容されてきました。そのおり、ドイツ軍の将校でしょうか、貴族とも聞きました。四、五家族、高良川の私の家より、少し川上のほうの住宅で生活するようになりました。久留米一の呉服商の持ち家でしたが、そこで、いなかには珍しく洋式の生活をしていました。一雄や米子は、そのドイツ人の子供たちと、高良川の川原でよく遊んでいました。

そして、作品の中でこのドイツの少女に檀は「ぼーら」という名前を与えているのである。父や母と別れて、祖母の大きな屋敷で暮す少年である主人公多田と「ぼーら」との場面を見てみよう。

多田が一番気が許せたのは独逸の捕虜の娘である。峻や祖母はよく名を呼んでいたが、たしかぼーらといった。多田と同年輩の七八歳であつたらう。多田のいた村はずれには師団があつて、独兵の捕虜がいかにめしい塙の中にかくれていた。人間を遮断する塙の高さを今でも思いだす。多田はぼーらとこの塙の側まで来ては、にぎやかな異国の会話の外にたちつくすのであつた。折々塙を越えてフットボールの大きい皮球がはずみだし、多田とぼーらは其の度葱島の中からそれを拾つ

て塀の中に抛りこんだ。勿論多田にはぼーらの言葉がわからなかったし、ぼーらにも日本語が通じなかった。そうして、いつのまにか二人の毎日の遊戯は繰りかえし繰りかえし同じことになりまわった。

この引用部分からでも、主人公多田の設定が、久留米時代の檀の環境と重なり合う部分があるのは明白であろう。その他にも、「ぼーら」と峻（結核で療養中の多田の叔父）と多田の三人で魚を獲る瀬多川は、高良川がモデルであるだろうし、作品の最後で、屋根から木へ飛び移れずに泣く多田の姿にも実際の檀の経験が反映しているという。

このように見てくると、「天明」や「母の手」という作品は、久留米時代の体験を語る核になっているし、「美しき魂の告白」等の作品には、久留米時代の体験が色濃く反映しているのである。

先にも述べたように、久留米市野中の祖父父母の家も、檀の△故郷Vの一つに過ぎないのだが、逆に言えば、△故郷Vの一つではあっても、檀の精神形成と文学に大きな影響を与えたことは間違いない、とも言える。それは、おそらく、「大きな森の家」の中で祖父父母からも、干渉されることなく、学齢に達するか達しない子供でありながら、孤独に生きねばならなかった日々が割り出したものなのであろう。

この他にも、自殺したと檀が述べている祖母<sup>注14</sup>との関係等についても、問題は残されているが、次稿に於いて考えたいと思う。

注 1 「じじはばの花」(「えきすぶれず日本通運」昭和三十九年四月十四日号)

注

注 2 「火宅の母の記」(高岩トミ・「新潮」昭和五十二年十月号、後に加筆して、昭和五十三年九月新潮社より刊)

注 3 『御家中書系譜』の他に、同書及び他の資料を基にして、本渡市史編纂委員鶴田文史氏作成の「本戸家系図」に依った。

注 4 注2に同じ。

注 5 「母の手」(「知性」昭和十七年十一月号)

注 6 注2に同じ。

注 7 注2に同じ。

注 8 「少年の日のけだるい孤独」(「東京新聞」昭和三十六年九月七日)

注 9 「わが顛落」(「新潮」昭和三十二年六月号)

注 10 注2に同じ。

注 11 「天明」(「現代」昭和十九年五月〜六月)

注 12 以下の記述は『久留米市史』第3巻(昭和60年3月発行)に依る。

注 13 注2に同じ。

注 14 「母の手」の中では、同居中に自殺したように述べているが、「詩人と死」(「午前」昭和二十一年八・九月合併号〜10月号)の中では、離別のように述べ、不明の点が多い。

付記 本稿の檀一雄の文章は新潮社版『檀一雄全集』に拠った。但し「天明」は初出に拠る。

尚、本稿作成にあたり、久留米市在住で、高岩トミの従兄弟に当られる、本戸幸彦氏より、様々な御教示並びに資料の提供を頂きました。ありがとうございました。

(久留米大学附設高校教諭)

(国土地理院発行1/25000地形図・昭和59年1月発行)



権一雄旧居・現住所久留米市野中町上の原二五一